[論文要旨]

明代会同館の基礎的研究

陳　越

本論文は明代両京師に置かれた会同館の基礎的研究である。明の会同館は元の制度を受け継いで設置されたもので、宿泊施設として朝貢使臣の接待に使われていた重要な外交機関である。しかしながら、今まで史料の限界により、その歴史像が明らかにされてこなかったことが現実である。

そのため、本論文は会同館を外交の場として認識し、従来の研究ではそれほど活用されていない朝貢使臣の記録や新史料の導入、旧史料の再読などによるものであり、さらに新しい研究成果に基づいている。このように実証的な研究を行った結果、会同館をより鮮明に描くことができた。

論文の構成は序論、第一章～第六章、そして結論からなっている。以下、各章ごとの内容を記す。

序論では、まず本研究の目的を示す。外交機関の一つである会同館が東アジアにおいて如何なる存在であったか、その実態究明に焦点を絞り、研究の視点と問題提起、研究の方法と特色および研究の構成を設定する。

第一章「明代の中央宿泊施設「会同館」」では、中国の正史などから歴代宿泊施設の名称を把握したうえで、遼・金・元時代の会同館を継承した明代会同館の変遷について論述する。また、両京師に置かれた会同館を南京会同館と北京会同館に分けて、建物の場所や規模などを究明し、日本側の史料によって、細部に至るまでの描写を補う。

第一章の補論として考察した、「もう一つの中央宿泊施設としての「烏蛮駅」」では、「烏蛮」という語の意味から論じており、「明都城図」「楼館図」「北京城宮殿之図」などの地図史料を利用し、日本や朝鮮の朝貢使臣が宿泊した会同南館は「四合院」の形をしていることが明らかとなり、さらに烏蛮駅の位置や内部構造を確認して、内部の想定図を描いた。

第二章「会同館における組織編制－兵部所属の大使・副使－」では、史料に登場した最初の会同館の外務官僚は兵部所属の副使（従九品）であり、最初に明文化された官員の設置も兵部所属の会同館大使（正九品）と副使（従九品）であったことを明らかにした。地方志による会同館大使・副使一覧を作成することで、正従九品だった大使・副使の任官歴を見た。兵部の三大職務をめぐる考察から、兵部大使・副使の力が弱まってきたことが分かる。

第三章「会同館における組織編制－礼部所属の提督主事－」では、いままで注目されてこなかった『礼部志稿』の性格を明らかにしたうえで、そこに載っている「歴官表」の利用価値を確認した。「歴官表」を手掛かりに、提督主事の任官歴や理想像が分かり、さらに時代別に分析した建白から親疎関係で示された「賞賚有差」の世界や明政府が直面していた問題も見えた。

第四章「会同館における朝貢使臣の接遇」では、洪武帝が唱え始めた「懐柔遠人」「厚往薄来」の外交理念に基づく使臣の生活物資である「下程」から親疎関係で示された「賞賚有差」を確認でき、「筵宴」の席順・儀式・天子座からは政治的な意味合いを読み取ることができた。

第五章「会同館における「開市」」では、朝貢貿易における私貿易の一つとして、会同館開市を取り上げ、開市の実態などを考察したうえで、朝貢貿易における会同館開市の意義を考えた。その考察から分かるように、明政府の対外交渉の姿勢は決して積極的なものではなく、むしろ消極的な面が多かったといえるかもしれない。

第五章の補論として、考察した「遣明使節の私貿易に関する一考察―策彦周良の『初渡集』を中心に―」では、遣明船貿易の三形態と私貿易を支える組織などを考察し、『初渡集』の記載を中心に、遣明使節による私貿易の実態をみた。

第六章「会同館における多国間交流」では、漢詩による交流を中心に、会同館における多国間交流について考察を試みた。「虚々実々」の狭間にある策彦周良の詩集から日中間において漢詩交流があったほか、朝鮮・安南・琉球使臣の間においても漢詩交流があった。漢詩の内容においては、表記・表現の「異」

があり、漢文力の差が見えた。一方、漢詩中にある「同」の部分から、その背後に中国という大きな存在があったことを窺うことができる。

結論では、六章までで明らかにした諸点を要約したうえで、東アジアにおける明代の会同館の歴史像を明らかにした。

付録として筆者の整理による「会同館大使・副使一覧」「『礼部志稿』「歴官表」所収提督会同館主事一覧」「提督会同館主事建白の関連史料」を載せた。これによって、本研究の価値は一層高まったといえる。

実態を考察した結果、そこに、①外交規模の拡大を表す「烏蛮駅」への取り組みや新築、②兵部・礼部統属下に置かれながらも館員の管轄権が礼部に移行、③明後期まで会典の規定通りに生活物資である「下程」の配布や政治的な意味合いを含む「筵宴」の挙行、④積極的な外交姿勢ではないが、ためらいつつも行われていた開市、⑤漢文力が表わされた多国間交流などによって表わされる会同館があった。

(2000字)